

<研究ノート>

コロナ前後の民俗行事の変遷 ーオーストリアのクランプスを例にー

菅 根 幸 裕

キーワード

新型コロナウイルス、クランプス、アドベントシーズン、ナマハゲ、民俗行事

要旨

新型コロナウイルスの蔓延が、民俗行事に与えた影響についてクランプスを題材に分析する。近世まで異端の象徴として扱われたクランプスは近代に入りキリスト教と融合し、アドベントシーズンの来訪神として親しまれた。日本のナマハゲに類似するクランプスは、オーストリアの大きな観光資源となったが、新型コロナウイルスの蔓延にともない縮小・中止を余儀なくされた。その様子とコロナ後の復旧についてフィールドワークを中心に報告する。

はじめに

2019年12月から世界中で流行した新型コロナウイルス（以下、コロナ）は、行動制限などの規制により我々の生活を一変させた。対面で行う民俗行事にも影響があり、2022年～2023年にかけて徐々に規制が解除され、民俗行事はかつての賑いを取り戻しつつある。

コロナのワクチンが各国で開発されると、ヨーロッパ諸国ではいち早くコロナのワクチン接種が行われた。特にEU加盟国の多くが陸続きになっているEUの域内で、人、物、サービスの流れが長期に渡り制限されれば、経済に多大な悪影響が見込まれる。少しでも感染のリスクを下げ、経済危機を回避するための措置であった。また、EUデジタルCOVID証明書（デジタルグリーン証明書）⁽¹⁾を導入した要因の一つに、民俗行事と観光収入が関連している。

草花が芽吹き、登山で観光客が賑わう春と夏が過ぎ、木枯らしが吹く秋になれば、やがてヨーロッパの内陸部は雪に覆われオフシーズンを迎える。冬のアドベントシーズン（待降節）でウィンタースポーツやイベントを目的に訪れる観光客は地元にとって重要な収入源であり、雪深い地域では観光客の足が途絶えれば、地域経済への悪影響が懸念される。

ヨーロッパでは、日没が早い冬について、闇に紛れて悪霊や死霊や先祖の霊がこの世とあの世を行き来すると信じられていた。ヨーロッパの山間地のチロル地方には当時の名残を感じる民俗行事が数多く伝えられており、冬のアドベントシーズンに集中している。

アドベントシーズンに行われる民俗行事の中で知られる12月5日に来訪するクランプスに着目した。クランプスはオーストリアの山岳地帯、ドイツ南部、スイス、スロベニア、イタリア北部、チェコ、スロバキア、ハンガリー、ルーマニア、クロアチアの一部に分布する。日本ではあまり馴染みのないクランプスだが、出で立ちが秋田県男鹿半島のなまはげに類似しているため、若い世代の間では「西洋版なまはげ」とも呼ばれている。既にウィーン大学出身の民族学者A.スラヴィク⁽²⁾、A.スラヴィクと面識のある日本の民族学と文化人類学を主導した岡正雄⁽³⁾、ドイツ文学者の浜本隆志⁽⁴⁾、高橋義人⁽⁵⁾が、なまはげとクランプスを例にヨーロッパと日本の行事の類似性を比較している。⁽⁶⁾

下記は、2023年12月のアドベントシーズンに行われたチロル地方での現地調査などを参考に、オーストリアの観光業の視点を踏まえ、クランプスの歴史の変遷をまとめた研究ノートである。自然崇拜を具現化したクランプスを異教と唱える時代があり、今日では認識が改められているものの、ペイガン(異教徒)と見なす風潮が残っているのも事実だ。そのため、I.ではキリスト教がヨーロッパに広まる以前の歴史と、ヨーロッパ諸国へ広まった概要をまとめ、キリスト教を布教するために異教徒として見なされた理由についても記述する。

I. クランプス

I-1. クランプスのルーツ

1991年9月19日、オーストリアとイタリアの国境にある渓谷でミイラが発見された。中年男性のミイラは、発見地のエッツタール・アルプスからエッツィと名付けられた。耕作や酪農が始まる以前より、アルプスの高山での人類の生活を裏付ける歴史的な発見だった。エッツィが生きた時代は5200年前～5300年前頃と推測されている。時代が下った紀元前5000年前～4000年前に、オーストリアのザルツブルクでは人類が定住するようになった。塩が採取できて、鉱物に恵まれるザルツブルクではハルシュタット文化が栄えた。ケルト人の移住、ゲルマン人の流入を経て、ローマ帝国の属州となるザルツブルクは、クランプスで知られる地域になった。

人類が太古より直面してきたのは自然がもたらす脅威であった。春が近づけば雪解けによる雪崩、過ごしやすい夏であっても適度な晴天で無ければ農作物や家畜は育たず、短い秋を経て冬となれば豪雪で家に籠らざるをえない。一方で自然からもたらされる恵みは生きる糧である。自然に対する畏怖や敬意は、クランプスやペルヒトなど伝説上の来訪神に置き替えられた。ナマハゲに似た怪物や鬼の姿で豊穡を授ける彼らは、悪霊から人類を守り続けた。⁽⁷⁾

しかし、それらの民間信仰は、ローマ帝国の宗教思想の発展において異教徒と見なされた。ローマ帝国の統一を図るには、キリスト教以外の民間信仰は快く見なされなかった。313年にローマ帝国のコンスタンティヌス帝が出したミラノ勅令によりキリスト教が公認されて以降、先住民の風習はキリスト教と融合し、ヨーロッパのカレンダーに反映された。例えば、ファスナハト(謝肉祭)、聖バルバラの日(12月4日)、聖ニコラス祭(待降祭)、クロイゼ(大晦日)、ペルヒタ祭(公現節)⁽⁸⁾、キリストの誕生を祝うクリスマス(聖誕祭)である。宗教学者の植田重雄は、ヨーロッパの文化は単一な文化層で成り立っているのではなく、ゲルマンの層、キリスト教の層、ケルトの層、ギリシャ・ローマの層が重なり、混然として多様であると解釈している。⁽⁹⁾

社会人類学者のマテウス・レストは、クランプスとキリスト教の融合について、CGTN Europeの取材でこのように答えている。

クランプスは16世紀の宗教改革の頃までに確実に文化に組み込まれた。強いカトリック道徳を羅針盤として聖ニコラスとともに家から家へと歩くのは、この頃の反宗教改革運動から生まれたからだと考えられる。(中略) 美術史はこの考えに信憑性を与えている。ヨーロッパの芸術家が悪魔をグロテスクな顔、動物の皮、角などの特定の形をした固定された存在として表現したのがこの時期だったからだ。マテウス・レストがオーストリアのケルンテン州にいた少年時代に、クランプスのパス（グループ）が準備をしていた場所は、教会の隣にある彼の実家であった。「準備をしている大人達は人間としてリビングルームに入り、クランプスとしてリビングルームから出てきた」「両親は私がクランプスに大変興味を持っており、大人達がクランプスに変身する過程に興味を持っている、と言っていた。しかし、大人達がクランプスのマスクを被った途端、私は大人達が怖くなった」⁽¹⁰⁾

筆者が2023年12月5日に、インスブルック州の中心街で見学したクランプスのパスに聖ニコラスはいなかった。筆者はインスブルック州で滞在した宿泊施設にて、フロントスタッフにクランプスはどのあたりで見学できるか質問をした。「クランプスが見られるのはこの辺りとこの辺りだ。聖ニコラスはこの辺りで見られるかもしれないが、彼らが登場する明確なスケジュールは分からない。運が良ければ出会える」フロントスタッフが赤いマーカーペンで市内の地図に丸く印をつけて、クランプスと聖ニコラスが現れる可能性のある場所をそれぞれ説明してくれた。日本で事前に用意した資料にはクランプスは聖ニコラスと同行する、またはクランプスに準ずる来訪神が聖ニコラスを先導する旨が記載されている。確かに聖ニコラスが同行しない地域もあると書かれた資料もあったが、多くは両者の同行が前提であった。

理由は定かではないが、クランプスのパスに聖ニコラスが同行しない地域はインスブルック州以外で幾つもある。地元の認識はクランプスと聖ニコラスは

それぞれ別であり、両者が登場する場所や日時が異なるケースは珍しくない。

I-2. 陰陽を成す

クランプスの語源は「Kralle」は中期ゲルマン語で「爪」、またはバイエルン語の「Krampn」で「枯れてしおれたもの」を指し、北欧神話の女神ヘルの子である。見た目は全身が毛に覆われた異形で、頭から山羊または羊の角を生やし、腰にはカウベルを着けている。真っ赤な瞳の半身半獣は、白樺を束ねて作られた鞭を手にして、冬になると人里に現れた。

グリム兄弟で知られるヤーコプ・グリムは「ドイツ神話学」で、異教の時代に神々が現れ幸運や救済を告げて知らせるとき、妖魔や小人を従者として傍に仕え民衆に神の祝福を具体的に伝えていと述べている。キリスト教の時代になり、キリストや聖母マリアから施しをする際に、ゲルマンのやり方に倣って聖者を傍に置いたが、その聖者がその地域に伝わる妖精などに替わった、とキリスト教と民間信仰の融合を示唆している。⁽¹¹⁾ ドイツ文学を専門とするの福嶋正純も、聖ニコラスの行列に登場する髭もじゃ男、ヤギの頭をもつハーバーガイス、大鎌を担いだ死神、藁束男、悪魔の仮面をつけた異形のものたちは、キリスト教とは本来何の関係もなく、ゲルマン時代の名残、善霊、悪霊信仰の名残とみている。⁽¹²⁾ 異教の信仰に加えて、仮装して暴れまわり、若者のエネルギーを発散させる意味も持ち合わせていた。

クランプスが聖ニコラスに同行する際は、クランプスが「鞭」、聖ニコラスが「飴」の役割を果たす。毎年12月6日に集落の家を訪問し、親の言いつけを守っている良い子へ聖ニコラウスは誉めの言葉とご褒美のプレゼント(ナッツ、果物、お菓子、玩具)を与える。怠けている子どもや親のいうことを聞かない子どもには、クランプスが白樺の枝を束ねて作られた鞭を持って近寄っていく。子どもがすっぽり入ってしまうサイズの大きな籠を背負い⁽¹³⁾、具体的な罪の内容を大声で叫ぶ。「親の言いつけを守らず手伝いをさぼった」「お使いに行くふりをして、実は行かなかった」「夕飯の前にこっそりおやつを食べていた」な

どである。訪問の前に親が我が子の悪事をクランプスに事前に知らせているのだが、それを知らない子ども達は毛むくじゃらの迫りくるクランプスに怯えてしまう。

子ども達は「教えを守ります」「罪を悔い改めます」と、泣いて許しを請う。そこへ聖ニコラスが現れ、改心すると約束した子ども達へ神の教えを忘れないよう言い聞かせ、改心を約束したご褒美にプレゼントを渡し、良い年を迎えるよう告げてから一行は次の家へ移動する。

アメリカでイベント企画を手掛けるジェレミー・シーガーズはクランプスと聖ニコラスの関係をこのように例えた。「The Krampus is the yin to St. Nick's yang」（クランプスは、聖ニコラスの“陽”に対する“陰”である）人は聖人と悪魔を持ち合わせており、多くの人が抱いている潜在意識を具現化したのが聖ニコラウスとクランプスであるという。⁽¹⁴⁾

聖ニコラスの教えを守らなければ、自分自身に災いがふりかかることをクランプスは身をもって教えてくれる。⁽¹⁵⁾ アルプスの過酷な自然環境を生き延びるためにも小さい頃から教え込むことも重要であるが、周囲で見守っている大人達への教訓も読み取れる。クランプスのように子ども達の負の側面ばかりを注意していないか、聖ニコラスのように愛情をもってしっかり誉めているか。クランプスと聖ニコラスは子ども達だけでなく、大人にも「鞭」と「飴」の使い分けを教えてくれる。年を越す前に自らの行いを振り返り、反省を来年に活かすのは大人も子ども関係ない。クランプスと聖ニコラスが同行する風習に変化があるのは理に適しているといえよう。⁽¹⁶⁾

I - 3. 郵便葉書とクランプス

今でこそアドベントシーズンに欠かせないクランプスであるが、世に認知されるまでの道のりは決して平坦ではなかった。時には為政者により異端と見なされ、クランプス以外の多くの来訪神が迫害の対象となった。例えば、第一次世界大戦後の不況が深刻化した1930年代はナチスをはじめとしたファシスト政

党が主にヨーロッパを中心に台頭した。世界恐慌で混乱したオーストリアも例外では無かった。1930年代にオーストリア・ファシズムの時代は、クランプスは反キリスト教的であり、社会民主主義の象徴と見なされていた。オーストリア・カトリック連合の新聞はクランプスのボイコットを呼び掛け、東チロルの中心都市リエッツではクランプスのダンスを禁止し、さらに聖ニコラスを目指す者は市の許可証を取得しなければならないと定めた。⁽¹⁷⁾

時の政権や時代情勢に翻弄されるクランプスであるが、世界で初めてオーストリアが郵便葉書を導入した19世紀後半あたりから徐々にヨーロッパで認知されるようになる。

中世から神聖ローマ皇帝位を継承したハプスブルク家の領地は、ネーデルランド（オランダ）を別にして、基本的に中央ヨーロッパに領地があった。統治エリアの情勢を把握するのに情報は必要不可欠であるが、海路は望めず、運河を建設し水路を確保するには膨大な資金を要する。そこで陸路のインフラ整備に目を付けたハプスブルク家は、既存の情報ネットワークを整備して近代郵便制度を構築した。1869年10月に世界で初めてオーストリア・ハンガリー帝国が発行した郵便葉書により、支配層や商人など一部の層に限定されていた郵便が大衆化した。1885年1月からグリーティングカードと絵葉書が許可され、民衆の間で葉書のやり取りが流行した。⁽¹⁸⁾

1880年代後半頃からクランプスが描かれた絵葉書が印刷され、アルプス山脈を越えて各地へ発送された。デザインを手掛けていたのは主に都市部に在住している流行に敏感なアーティストであった。⁽¹⁹⁾グリーティングカードで特に需要があったのはアドベントシーズンで、穏やかな聖ニコラウスが人気を博しただけでなく、クランプスの身の毛がよだつようなイラストも人気があった。印刷技術の発達も拍車をかけ、第一次世界大戦がはじまるまでの1898年～1914年のアドベントシーズンにクランプスが描かれたグリーティングカードはヨーロッパ全土に広まった。それらに書かれた人気のあるフレーズは「Gruss Vom Krampus（クランプスからの挨拶）」と「Brav Sein（善良であれ）」の

2つであった。また、1905年12月6日に郵送されたグリーディングカードの1枚には「不道德な子供のために」と書かれている。⁽²⁰⁾

日本では年の変わり目に年賀状を送るが、ヨーロッパではアドベントシーズンにグリーディングカードを送る。家族や友人など親しい人の間で交わされるグリーディングカードには、気持ちを改め、お互いに快く新年を迎えようという意味が込められている。多様なデザインのクランプスのカードや絵葉書が本や雑誌で紹介され、移民によりクランプスが伝えられたアメリカではクランプスのポストカードの展示会が開かれ、クランプスをモチーフに描いたサスペンスホラー映画が製作されるなど現代でも人気である。

II. コロナ前のクランプス

II-1. クランプスと観光事情

2000年代に入り、オーストリアのクランプス関連のイベントが大幅に増加した。⁽²¹⁾ その背景にオーストリアの観光業と地域経済が関連している。

ザルツブルク州にあるガスタイン渓谷は古くより貴族や富裕層に人気のあるオーストリア有数の温泉地である。クランプスの慣習がある同地は、ウィンターシーズンになるとヨーロッパだけではなく世界中からスキー客が訪れる。クランプスのイベントは毎年12月5日（町）と12月6日（農村部）で開催される。3つの町からなるガスタイン渓谷には80～100のクランプスのパスがあり、家から家へと巡っていく。クランプスのイベントではレンペルン（押合い）が行われる。レンペルンとは、異なる2つのパスが出会うと、聖ニコラウスが仲裁に入り、双方のリーダーが頭を下げ、他のクランプスは押合いを始め、押合いが終わるとお互いの行進の無事を願い去っていく一連の行動を指す。⁽²²⁾

ザルツブルク州では旧市街、郊外を問わず11月初旬～クリスマスにかけて、クランプスのイベントが開催される。クランプスを一目見ようと多くの観光客が訪れ、安心安全なイベントの開催が自ずと求められる。イベント会場では警備員を各所に配置してクランプスと観光客の間に隔たりを設け、ロープを張っ

て一定の距離を保つなど、開催にあたり混乱を防ぐ対策を取っている。その一方で、何世紀にも渡る伝統をもつクランプスの風習が、観光客やメディアの影響で大衆娯楽化されるのを危惧する声もあがっている。⁽²³⁾ また、観光客を受け入れる地元もそれ相応の準備をしても間に合わないのが現状だ。日本でもコロナが感染拡大する2019年以前より、訪日外国人の増加によるオーバーツーリズムが課題になっている。例えば岐阜県の白川郷は、雪景色が美しい冬が特に訪日客に人気である。何台もの大型観光バスで訪れ、伝統的な合掌造りの建造物を見学するも、見学が許可されていない合掌造りの民家に侵入したり、トイレにホッカイロを流して詰まらせたり、トラブルが後を絶たない。コロナの感染拡大が収束に向かい、人流が活発になったアフターコロナで課題は再燃している。⁽²⁴⁾

オーストリアで最も多くの観光客が訪れるチロル州は、日本の新潟県と同じくらいの大きさであるが、人口は739,002人と人口密度がとても低い地域である。観光では2015年に述べ宿泊者数は約4,500万人泊（1,100万人来訪、平均滞在日数は約4.2泊）で、2番目に宿泊者数が多いザルツブルク州の2,600万を大きく上回っている。また、観光客による消費額はチロル州の総生産額の17.5%を占めており、国内からの来訪はわずか8.6%に過ぎず、観光産業は地域の最重要産業として位置づけられている。また、チロル州観光局は独自に調査を行い、観光客の消費額による経済波及効果も算出しており、チロル州にとって観光の重要性が周知されている。^{(25) (26)}

ザルツブルク州と同様にチロル州もスキーリゾートであり、アドベントシーズンに登場するクランプスはアルプスの象徴としてして外せない。しかし、著者が動画にてクランプスのイベントを閲覧した際、伝統的なクランプスを知る人にとって違和感があるかもしれないと思った。⁽²⁷⁾ 見物人の歓声をあびながら、スマートフォンで写真や動画を取られ、街中を歩き回るクランプスや聖ニコラスなどの様子は、伝統がただの見せ物であるかのように感じるだろう。⁽²⁸⁾

日本ではチロル州のセルデンと新潟県の南魚沼市、同州のサンクト・アントンと長野県の野沢温泉村が姉妹提携を行い、交流を深めている。⁽²⁹⁾ いずれも豪

雪地帯ではあるが、リゾート地として知られ、スキーが有名である。冬季に故郷を離れて他所へ出稼ぎをするより、インフラを整備して宿泊施設を整え、外部から観光客を受け入れれば人口流出を防ぎ、地域経済の安定に繋がる。しかし観光客を受け入れるにあたり、地元民と折り合いをつけるのは容易ではない。地の利を生かし地域経済の活性化に繋がりたいが、それに伴い生じる摩擦をどのように解消するのか、課題はつきない。

II-2. コロナの感染拡大と民俗行事の制限

2020年から2021年の間はコロナの感染拡大防止を目的にロックダウン、行動制限が設けられ、約2年間クランプスをはじめとした民俗行事は開催の中止、規模の縮小、簡略化を余儀なくされた。日本から海外への渡航制限があったため、イベントの情報はインターネットにて検索した。随時各イベント団体のHPの情報が更新されており、削減された情報もある。そのため自身で保存したデータも参考にオーストリア、及び隣国ドイツで中止された例をあげる。

2020年12月5日にレッツゴークランプス・ランがシュタイアーマルク州・グラーツのグラーツ公園で開催予定だった。ロックダウンの最中であったが、コロナ予防対策を徹底し、規模を縮小して開催する方法を模索していた。中止の理由を担当者は「担当当局と緊密に協力し、最優先の状況を考慮してイベントを決断せざるを得なかった。人々の健康が常に最優先される」ためと説明している。⁽³⁰⁾

同様に開催が中止となったザルツブルク州・ザルツブルクの旧市街ではクランプスとペルヒタが現れる予定であった。手彫りの木製マスク、毛むくじらの毛皮の衣装、重い鐘で飾られた来訪神が冬を追い払い、何世紀にもわたる習慣を体験できるのが同イベントのアピールポイントである。⁽³¹⁾

またオーストリアの放送・メディア製作会社Antenne Steiermark（アンテナ スティリア）は2020年にクランプス・ランの開催が中止になった代わりに、オンライン・クランプスパレードを動画サイトにアップしている。軽快な

BGMに合わせて、異なるデザインのマスクと衣装を着用したクランプスが広大な山脈を背景に、麓へ繰り出すシーンから映像がはじまる。街に降りたクランプスは鞭や、花火、松明を手にして縦横無尽に観客の前を歩き回っている。クランプスを前に身を縮める子どもや、怯えながらもクランプスに好奇心の目を向ける大人が次々と映し出された。観客の反応を楽しんでいるのか、設けられた柵を掴みガシャガシャならず興奮した様子のクランプスがいた。すぐ傍には黄色、もしくは赤の蛍光のベストを着用したスタッフが警備にあたっており、クランプスの行き過ぎた行動を制しているようだった。聖ニコラス、煌びやかなコスチュームに身を包んだ女性、子どものクランプス、ライトに照らされた改造車が映像に次々と映し出された。⁽³²⁾

隣国ドイツでもクランプス関連のイベントは中止されている。1980年から活動しているバイエルン州のKrampusgruppe Haiming（クランパスグループ・ハイミング）は2020年に記念すべき40回目のクランプス・ランの開催を予定していた。コロナの感染状況を考慮し中止した代わりに過去のクランプスランの映像を編集した「デジタルハイミンガークランプスラン」を作成しWebサイトで公開している。⁽³³⁾

オーストリアは2020年3月16日より開始された外出制限措置を、2021年2月8日より日中の移動制限を解除し、夜間の外出禁止へと緩和した。同年12月11日にロックダウンを解除したが。ワクチン未接種者へのロックダウンは継続した。2022年1月31日で未接種者へのロックダウンを終了している。⁽³⁴⁾

ヨーロッパの旅行サイトやクランプスの各団体は2022年春頃からクランプス関連のイベントの告知を行っており、2022年は例年ほどの規模とはいかないがイベントが各地で復活したようである。著者は可能であればアフターコロナ直後のクランプスのイベントを見学したかったが、日本ではコロナの感染減少の見通しが立っておらず、渡航規制が厳しかった。残念ではあるが1年経てば現地ではコロナ前のイベントの規模に戻っているかもしれないと期待し、渡航を見送った。

Ⅲ. コロナ後のクランプス

Ⅲ-1. インスブルックのクランプス

今回のフィールドワークは3つの条件を満たしている場所を選んだ。第1はクランプスを見られる可能性が高い場所である。第2は日本で有名なウィーンやザルツブルクは避け、地方都市に行く。観光客向けのクランプスの演出がされている可能性が高いのではないかと懸念したからだ。第3に冬の間は雪に閉ざされる豪雪地帯を体験すべく山を登る。夏ではないので本格的な山登りはできないが、交通インフラを利用して移動ができる地元の山岳を探した。

そこでチロル地方の古都インスブルックを選んだ。2000m級、3000m級のアルプスの山々に囲まれているインスブルックは、パプスブルグ家の歴代の皇帝たちに引き立てられてきた。インスブルック駅からインスブルック各所へのバスが出ており、市街地からバスで30～40分離れた街で伝統的なクランプスのイベントが開催される。3つの条件を満たしていたインスブルックを目指し、日本からドイツのミュンヘン経由で向かった。

2023年12月2日にドイツは例年にない寒波に見舞われた。出発当日の同年12月3日は現地の天候を考慮したためか離陸が3時間弱遅れた。ロシア情勢が不安定であることもあり迂回して北極圏を経由したため、通常のフライトより更に2時間程度時間を要したと思われる。

12月4日の20時過ぎにドイツのミュンヘン空港に到着し、ミュンヘン中央駅へ電車で向かった。通過する途中駅のホームを電車の窓越しに眺めると、約30cm前後の雪が積もっていた。

冬のヨーロッパの積雪をあまり気にしていなかったが、道中に影響が出るほどとは想定していなかった。翌日にオーストリアへ移動するために予約していたEC（国際特急ユーロシティ）が運休になった。運休を知ったのは日付が変わったばかりの12月5日の深夜である。途中で通過する山岳地帯の降雪量が危険ラインに達したからだ。雪の影響で祭の開催当日にドイツからオーストリアへの移動が困難になると想定していなかった。早朝に宿泊先をチェックアウト

トして、ミュンヘン中央駅から中央バスターミナルZOB（長距離路線バス乗り場）へ移動し、14：00発インスブルック行きのバスに乗った。駅もバスターミナルもスキー道具を一式抱えた旅行者で混雑しており、出発の1時間前にはインスブルック行きのバスのチケットは完売していた。

バスで隣席になったドイツ生まれ・ドイツ在住の女性が、大雪の影響で12月2日はミュンヘン空港が終日閉鎖されていたと教えてくれた。「雪が吹雪く中よく日本から来た。運が良かったからだ」と驚かれた。

当初の予定では12月5日の11：30にはインスブルック中央駅に到着し、バスに乗ってゲッツェンスへ向かい、16：00より始まる聖ニコラスのパレードを見学する予定だった。^{(35) (36)} ゲッツェンスはインスブルック駅からバスで30分程度のところにある人口1400名の小さな街である。聖ニコラスの同行者にクランプスがいる可能性が高いため目的地の一つに選んだ。見学が終わったらインスブルック中央駅へ戻る予定だったが、パレードに間に合わないためゲッツェンス行きは諦めた。17：30過ぎにインスブルック中央駅へ到着し、滞在する宿泊施設へ荷物を置いた。前述したとおり宿泊施設のフロントスタッフにクランプスが現れそうな場所を聞き、マリア・テレジア通りの入り口にある凱旋門へ向かった。現地の気温は－2度。例年1月が一番冷え込む時期で、－6～－8度程度まで冷え込む。雪と風が止む様子が無く、視界があまり良くなかった。フロントスタッフから貰った地図を頼りに、旧市街の入り口にあたる凱旋門を右に曲がった。周辺の建物にクリスマスのイルミネーションが装飾されており、更に先へ行くとアルプス地方の中でも最も美しく情緒的なマーケットと言われるインスブルックの旧市街のクリスマスマーケットがあった。クリスマスツリーの周辺にはオーナメント、チロルの手工芸品、地元の郷土料理など、多くの屋台が軒を連ねていた。やがて、遠くの方からやや濁った鈴の音色が聞こえてきた。ガラン、ガラン、ガラン、聞きなれない音の鳴る方へ足を向けると、数メートル先に雪の中を平然と立つ毛むくじゃらの何かが見えた。クランプスである。1体ではなく、複数のクランプスが鞭を手にして歩いていた。10歳くらいの子

ども（男児、離れた場所にクランプスに扮した同世代くらいの女兒がいた）がクランプスに扮し、同じくクランプスに扮した両親と何やら話をしている。父親らしき男性はマスクを被ったままだが、母親らしき女性はマスクを両手に抱えていた。以前は集落で10代後半～30代の男性がクランプスに扮していたが、近年は子どもや女性がクランプスに扮しているのは珍しくない。半ばクランプスとの遭遇を諦めていたので、写真を撮ろうとデジタルカメラを構えたその時である。

「パチィ」突然、何かで右太ももの辺りを叩かれた。痛くはないが、突然の出来事に驚いて後ろを振り返ると、クランプスが長い鞭を振り下ろして筆者に顔を向けていた。山羊の大ぶりの立派な角を生やした黒い毛むくじゃらのマスクから向けられる、赤く充血した二つの瞳から目が離せなかった。暫く膠着していたがクランプスは無言で踵を返し、大股で歩き出すと周囲の見物人へ容赦なく鞭を振るっていた。



マスクの調整をされているクランプス 2023.12.5 撮影

広場の中心地にあるアンナ記念塔そばあたりに、20体を超えるクランプス

が集まっていた。LEDライトをマスクに装着し、両目を青く光らせるクランプスと目が合うと反射的に顔を背けてしまった。子ども達を連れ去る際に使う大きな籠を背負ったクランプスもいた。その集りから少し離れた場所で青緑の警備服と蛍光の反射ベルトを身に着けた警備員が、クランプスの衣装を着用した男性のマスクを調節していた。被ったマスクが前後にぐらついて、うまく被れないようだ。警備員が何度かマスクを頭から外し、クランプスの頭に被せようと苦戦していた。遠目からではあるが、マスクがゴムのようにになっているあたり、木彫りではなく何か柔らかな素材で作られているようである。他のクランプスは、サービス精神旺盛に見物人を楽しませていた。毛むくじゃらの大きな手で頭を撫でられた女性は、髪の手を気にすることなく声をたてて笑っていた。見物人たちと肩を組んで、記念写真に応じているクランプスもいた。クランプスにこっそり背後に回られて、鞭を叩かれて悲鳴を上げた観光客の男性を見た群集から笑いが籠れた。鞭で打たれた観光客の男性も周囲につられて笑っていた。

パスはマリア・テレジア通りの突き当りにあるインスブルックの象徴である黄金の小屋根の方へ向かっていった。著者もその後を追っていたが、ダウンジャケットに薄っすら積もった雪を払うため、店の軒下に移動した。気が付くと、クランプスが目の前に立っていた。先ほどと異なるクランプスで、今度は左の太ももあたりを鞭で叩かれた。鞭に打たれたのが2回目だが、打たれても痛くはない。鞭の動きがしなやかであるため、白樺の木の枝で作られた鞭ではないようだ。

市の塔と黄金の小屋根の間あたりで、マスクを外し立っている男性を見かけた。緩いウェーブの栗毛色のセミロングの男性の髪は、雪が積もってところどころ白くなっていた。クランプスに扮するトランス状態から、マスクを外して現実に引き戻し、一休みしていたのだろうか。近づく著者に気が付いた男性は、顔を一瞬背けると慣れた手つきでマスクを被り、クランプスになった。木彫りの仮面ではなく、こちらのマスクも何か柔らかい素材がベースのようだ。マス

クを装着し威嚇するようにゆっくりと近づいてくるも、著者の頭を優しく撫でてそのまま他のクランプスの元へ行ってしまった。



クランプス(右)と著者(左) 2023.12.5 撮影

旧市街の中心地にある時計台を見ると、20時20分を過ぎていた。クリスマスマーケットの営業時間は21時までである。クランプスもそろそろ彼らの住処に戻る時間であろうか。年に一度出会えるクランプスとはこのあたりで終わりのようだ。

出会ったクランプスは遠目からみても迫力があり、眼力のある両目で睨められると足がすくんでしまいそうであった。家に来訪したクランプスに怯えて、子ども達が逃げたくなる気持ちが分かる気がした。推測であるが、インスブルックの旧市街の観光スポットであり、伝統的なクランプスよりは外部から訪れる観光客向けの大人しいクランプスを演じていたのであろう。クランプスの中には、マスクを外し景気付けと言わんばかりにワインをラップ飲みする若者もいたが、大半は気さくなクランプスであった。

日本のナマハゲも民家に来訪する前に日本酒を飲み、家に上がっては家主か

ら酒をすすめられ飲んでいたため、廻る家の最後のほうになると酔っぱらって素行不良になる。⁽³⁷⁾ 以前、筆者が男鹿半島を訪れた際に、ナマハゲを二度と自宅には呼ばないと苦言を呈した男性と出会った。男鹿半島生まれの男性は、成人を期に他県へ引っ越したが数年前に男鹿半島に戻った。小さい頃に見たナマハゲが懐かしくなり、幼い娘にナマハゲを体験して欲しかったので、ナマハゲ2体を招いたそうだと。ところが幼い娘は執拗に迫るナマハゲに怯え、泣いていた。当時の経験がトラウマになったのか、成長した今でもナマハゲを見ると抵抗感を示す。ナマハゲ2体が家から出る際には酒に酔った勢いで、内1体に玄関のドアを壊された。主催者の町内会から修繕費を渡されたが、金銭の問題ではないとため息をついていた。

伝統的なクランプスのパスは、祭りの前にワインを飲んでから出発する。開催されるのは冬の外気温の下がる夜なのでアルコールで身体を温めるのだ。しかし、非日常的な演出もあってかワインを飲み、酔った勢いで民家に入り部屋を荒らし、粗野な行為をするクランプスもいるので、地元住民でさえ苦言を呈している。^{(38) (39)}

前述したとおり、クランプスへ仮装するのは若者のエネルギーを発散させる意味を持ち合わせている。また、鞭を振るうのは厄除け、悪魔祓いを意味しており、鞭で打たれるのはむしろ縁起が良いとされる。今回見たクランプスは意図を理解したうえでクランプスになっているのであろう。そうでなければ、外部から訪れる見物人を楽しませるパフォーマンスは行わず、勝手気尽にふるまうはずである。しかし、警備員らに誘導されてパスが移動していた様子を見る限り、クランプスが予測していない行動を起こすのを未然に防止する配慮があると考えられる。見学をする側の我々も、クランプスをただの祭りと捉えず事前に知識を仕入れた上で参加するのがマナーであろう。

Ⅲ-2. チロル地方の生活

インスブルック滞在2日目の12月6日はチロル民族博物館、ノルトケッテ連

峰の展望台ハーフェレカー及び、フンガーブルクのクリスマスマーケット、マルクトプラッツのクリスマスマーケットを巡った。同クリスマスマーケットには聖ニコラスが訪れる予定であった。

インスブルックの観光案内所へ立ち寄り⁽⁴⁰⁾、チロル民族博物館へ向かった。チロル民族博物館は隣接する宮廷教会付属の修道院として建てられ、中庭や回廊も当時の面影を残している。伝統工芸品、昔の建物のミニチュア、衣装、谷によって様式が異なる古い居住空間を再現した部屋がある。印象的だったのが鶏の彫り物の隣に飾られている山羊の彫り物である。昨晚見たクランプスのマスクにつけられた迫力のある大きな角は彫り物に精巧に表現されている。16世紀頃の彫り物だったと思われるが、製作者の名前は定かではない。クランプスが地元にとって馴染みのある存在だと確信した彫り物であった。

古い居住空間が再現されている部屋は寒冷地ならではの造りであった。寒気を室内に入れないため窓は小さく造られており、窓ガラスは厚みがある。部屋に備え付けられたストーブはタイル張りである。熱の伝導率が高くなるように工夫されているようだ。カトリック信仰が浸透している証拠に、十字架に貼り付けにされたキリストの偶像が居間に飾られていた。クランプスに関する展示もあるのでは、と思い館内を探し回ったが山羊の彫り物以外見当たらなかった。インフォメーションのスタッフに聞いたところ一切無いと言われた。他の来訪神に関する展示品も見当たらなかったので、カトリック信仰に沿わない展示は敢えて避けているのであろう。

チロル民族博物館の見学を終えると、博物館から歩いて15分のところにあるフンガーブルクバーンの乗り場へ向かった。ノルトケッテ連峰を目指し、ケーブルカーとロープウェイ（総称：ノルトケッテンバーン）を乗り継ぎ、標高2334mのハーフェレカーの展望台へ到着した。日差しが時々差し込む穏やかな市内の天候と真逆で、展望台に至るまでの間、濃い霧と吹雪で山の様子があまり分からなかった。一瞬視界が開けると山の急斜面をスキーマーやスノーボーダーが滑っているのが見えた。展望台に到着し、70～80mほど先に見える休

憩所らしき小屋を目指して歩くも、膝のあたりまで雪に埋まってしまった。これ以上進むのは危険と判断し、展望台まで引き返した。同じゴンドラに乗っていた観光客らも早々に引き返してしまったようである。著者もゴンドラの待合室へ向かいたかったが、暫くの間ノルトケッテ連峰を見渡していた。

豪雪地帯を体験することを目的の一つにしたのは、家に籠って越冬せざるを得なかった昔の人の様子を少しでも体験できればと考えたからだ。冬の日照時間は短く、午後2時半から3時になると太陽は沈みだす。科学が発達していなかった時代は、尚更自然の脅威とうまく付き合う方法を考えざるを得なかったであろう。人間の力が及ばない自然の脅威を野生動物（山羊、羊）の姿に置き換え、来訪神として崇め、自然を味方につけてこの寒さを乗り越えてきたのだ。

展望台から降りて、フンガーブルクのクリスマスマーケットへ移動した。旧市街のマーケットと異なり、店舗は10にも満たない小さなマーケットであった。聖ニコラスと天使の一行に逢える可能性があるとは聞いていたが、1時間たっても現れる気配がなかった。

残念であるが、他の場所で会える可能性に期待した。下山後、イン川沿いのインスブルック・マルクトブラッツのクリスマスマーケットへ向かった。フロントスタッフから運が良ければ聖ニコラスに会えるかもしれないと教えてもらったマーケットの一つである。時刻は14時を回っていた。地元民と観光客で賑わうマーケットを一周するも聖ニコラスを見かけなかった。暫くマーケットに留まっていたが、日が落ちてきたので已む無く断念した。

翌日入手した地元の新聞（Tiroler Tageszeitung）を開いたところ、聖ニコラスが天使を引き連れて歩いている写真が1面に飾られていた。⁽⁴¹⁾ ⁽⁴²⁾ 聖ニコラス一行はイン橋を渡り、旧市街を横切って聖ヤコブ大聖堂へ向かったと書かれている。聖ニコラス一行がマルクトブラッツのクリスマスマーケットへ来訪したのは16時30分頃であった。ほんの30分前までマーケットにいたが、タイミングが悪かった。聖ニコラスを話題にした新聞記事は他にも複数あり、中には風刺画に聖ニコラスとクランプスが描かれていた。⁽⁴³⁾ ⁽⁴⁴⁾ ⁽⁴⁵⁾ 残念ながら聖ニコラス

には会えなかったが、新聞記事を通して市民生活に浸透した様子が分かり、収穫の多い2日間であった。

Ⅲ－3. クランプスの絵本が子ども達や大人へ伝えるメッセージ

インスブルックの滞在3日目の12月7日はクランプスに関する資料を探すために再び旧市街へ向かった。マリア・テレジア通りに大型の本屋があったので、恐らく関連書籍があるだろうと思った。しかし、期待に反してクランプスに関する専門的な書籍が見当たらなかった。書店の店員に聞いてもクランプスの専門書はないと言われた。クリスマス関連のコーナーにあるのではないかと予測し店内を歩き回り、漸く2階の奥の絵本のコーナーで聖ニコラスとクランプスの可愛いイラストが表紙の絵本を見つけた。

1冊は表表紙に雪に覆われた山中を背景に聖ニコラス、クランプスのグラウスとロバのフィン、そしてキツネが描かれている「Nikolaus und Krampus Graus」である。裏表紙には雪が積もった木の陰から悪戯を仕掛けようとしているクランプス3体（コンラッド、クヌート、カシミール）が描かれている。⁽⁴⁶⁾

2冊目はその続編となる「Krampus Graus hilft Nikolaus」である。表表紙には家の中で聖ニコラス、袋からプレゼントを取り出すクランプスのグラウスと、それを見守るロバのフィン、プレゼントに手を延ばしたりしている5名の子ども達が描かれている。裏表紙のクランプス2体（クヌート、カシミールのみで、窓枠の大きさの都合かコンラッドは描かれていない）は、窓からこっそり部屋の中を覗き込んでいる。⁽⁴⁷⁾

2冊の物語の概要はこうである。聖ニコラスはロバのフィンと共に子ども達へプレゼントを運ぶ袋を担いで何マイルも歩いていたら、薪にあたっている3体のクランプスに荷物運びの手伝いを依頼するも断られてしまう。諦めた聖ニコラスがとある一軒家のドアを開けると、中で子ども達に配るお菓子作りに勤しんでいるクランプスのグラウスと出会った。クランプスのグラウスを仲間に迎え、いざ子ども達の住む街へ向かうも、道中に先程の3体のクランプスに邪

魔をされてしまう。アナグマ、ネズミ、キツネの助けがあり、聖ニコラス一行は無事街へ向かった。一行は全ての家の子ども達へプレゼントを配り終えるが、クランプス3体（コンラッド、クヌート、カシミール）は何故プレゼントを配るのか不思議に思いながらその様子を見ていた。そして、3体のクランプスはアナグマ、ネズミ、キツネに雪をかけられたりした報復に彼らの住処を壊してしまう。住処を壊されたアナグマ、ネズミ、キツネは嘆き悲しむが、プレゼントが欲しくていたずらをしたと察した聖ニコラスは、3体のクランプスに壊した家をなおしたらプレゼントをあげると提案する。破壊した家よりも立派な家を建て直したクランプスに3体は、聖ニコラスからご褒美のプレゼントを貰い、ハッピーエンドで物語は締めくくられる。

印象的だったのが住処を意図的に破壊したことを咎めるのではなく、何故破壊したのか3体のクランプスの心情を理解し、許しのチャンスを与えた聖ニコラスの描写であった。幼子に例えれば、周囲に構ってもらいたさに度の過ぎたいたずらをしたようにも置き換えられる。例えば一昔前の日本昔話の猿蟹合戦のように勧善懲悪ではなく⁽⁴⁸⁾、悪いことをしても反省して態度を改めれば聖ニコラスは許してくれる。「何事も悔い改めて日々の生活を送りなさい」と、聖ニコラスから子ども達と子ども達を教育する大人達へ送られたメッセージのように感じられた。

絵本を購入後、チロル地方の先史時代から現代までの絵画、キリスト教美術を展示するチロル州立博物館フェルディナンドウムを見学した。入口でインスブルックカードを提示するとアドベントシーズン期間は無料で見学が可能だから自由に見学して構わないと受付のスタッフに言われた。

短い滞在であったがインスブルックともお別れである。往路では雪の影響で乗れなかったユーロスターに乗ってインスブルック中央駅からミュンヘン中央駅へ向かった。窓から見えるのは雪に覆われた山々である。どこまでも延々と続く雪の光景を眺めながら、チロル地方のクランプスや、神々が遥か昔からチロルに生きる人々の生活に今なお浸透している理由が分かった。

終わりに

2019年12月末より全世界に広がった新型コロナウイルスの感染拡大は、人・物・金の動きを鈍らせた。停滞する経済の流れを回復すべくEU諸国でいち早くコロナのワクチン接種が行われ、デジタルグリーン証明書が導入された。その要因の一つに民俗行事と観光収入が関連している。11月になればヨーロッパの内陸部は雪に覆われる。一方、一年で最も賑わうアドベントシーズンでもあり、数多くの民俗行事が行われる。その時期に観光客が途絶えれば地域経済への悪影響が懸念される。

そこで冬のアドベントシーズンに行われる民俗行事の中で知られる12月5日に来訪するクランプスに着目し、民俗行事が観光収入と関連して重要視されている理由について、チロル地方での現地調査などを参考に、オーストリアの観光業の視点を踏まえて研究ノートとしてまとめた。

2020年から2021年の間はコロナの感染拡大防止を目的にロックダウン、行動制限が設けられ、クランプスをはじめとした民俗行事は開催の中止、規模の縮小、簡略化を余儀なくされた。2022年には例年通りの規模とはいかずとも、民俗行事が復活している。日本から海外への渡航制限が厳しかったため、筆者は2023年12月5日に開催されたインスブルックでのクランプスを見学し、その後に現地にて資料の収集とクランプスに関連する施設などを見学した。

かつてはローマ帝国において異教徒と見なされたクランプスであったが、現在は場所によってはキリスト教と融合し、先人の教えを現在に伝えている。実際にクランプスに遭遇して感じたのが、観光客を意識したパフォーマンスがクランプスが行っていることである。かつて、クランプスへ仮装するのは若者のエネルギーを発散させる意味を持ち合わせていた。昔ながらのクランプスを継承するエリアもあるが、少なくとも観光地で行われるクランプスの振舞は理性的であった。警備員やスタッフはクランプスが予測しえない行動をしないように誘導しており、そのおかげもあり、著者を含め観光客は安心してクランプスを見学できた。

一例であるが日本のナマハゲも「家の中を荒らされるから」「子ども達のトラウマになるから」という理由で、ナマハゲを家にあげないケースが増加している。核家族化が進み、地域ぐるみの民俗行事に抵抗を感じる世代が増えているのも要因である。昔ながらの伝統を継承するのは重要であるが、地元の人々から受け入れられなければ必然的に民俗行事は衰退してしまう。クランプスが現代に続いている背景に地元の人々が時流を読みつつ、民俗行事を遂行している工夫が垣間見れた。

調査期間が短く、集めた資料が十分であったとは言い難いが、様々な収穫があったフィールドワークであった。

最後に、本論を作成するにあたり元東洋大学大学院でフリーライターの甲村綾香氏の多大な協力を得た。改めて感謝の意を表明する次第である。

【註】

(1) EUデジタルCOVID証明書（デジタルグリーン証明書）はEU版のワクチンパスポートである。既にEUを離脱しているイギリスではほとんど使用できないが、デジタルグリーン証明書があれば国境を越える際に検疫や隔離が不要となり、国境を越えて移動がしやすくなった。2022年の2月以降、ヨーロッパ諸国では規制が徐々に撤廃されており、現在は規制が無く自由に国と国を行き来できる。サマーバケーション(長期夏季休暇)を狙った経済政策でもあり、国境を越えて観光客を呼び込むためにデジタルグリーン証明書の導入が急がれたのだ。

(2) A.スラヴィク・著、住谷一彦・翻訳(1984)『日本文化の古層』未來社

(3) 大林太良・編集(1994)『岡正雄論文集 異人その他 他十二篇』岩波文庫

(4) 浜本隆志(2011)「日本のナマハゲとヨーロッパのクランプス」『関西大学東西学術研究所創立六十周年記念論文集』pp.223-246 関西大学出版部

(5) 芳賀日出男・文・写真、高橋義人・序文(2003)『ヨーロッパ古層の異人たち－祝祭と信仰』東京書籍

(6) 相模原図書館1Fではクランプスとなまはげの展示をしていた。

(期間：2018年11月24日～2019年2月15日)

相模原図書館「雪降る夜の来訪神～西洋のクランプス・日本のなまはげ～」

<https://library.joshibi.ac.jp/news/exhibition/sagamihara/%E3%80%8C%E9%9B%AA%E9%99%8D%E3%82%8B%E5%A4%9C%E3%81%AE%E6%9D%A5%E8%A8%AA%E7%A5%9E%EF%BD%9E%E8%A5%BF%E6%B4%8B%E3%81%AE%E3%82%AF%E3%83>

%A9%E3%83%B3%E3%83%97%E3%82%B9%E3%83%BB%E6%97%A5%E6%9C%AC%E3%81%AE/ 2024.6.20閲覧

- (7) 谷口幸男・遠藤紀勝・著(1998)『図説 ヨーロッパの祭り』
- (8) 地域により異なるが、クランプスは待降節(12月25日の約4週間前の日曜日からクリスマス・イブ)、ペルヒタは公現節(待降節から1月6日)に来訪する。20世紀頃からクランプスとペルヒタの区別が曖昧になり、両者は混同されやすくなった。待降節にペルヒタと聖ニコラスが来訪する地域もある。
- (9) 植田重雄(1999)『ヨーロッパの祭と伝承』講談社
- (10) CGTN Europe 「The Krampus, or Christmas demon, evolves for modern times」
<https://newseu.cgtn.com/news/2021-12-24/The-Krampus-or-Christmas-demon-evolves-for-modern-times-The-Alps-13b5qnH3hu0/index.html> 2024.7.3閲覧
- (11) Jacob Grimm, *Deutsche Mythologie*, Austrian, Akademische Druck- u. Verlagsanstalt, 1968
- (12) 福嶋正純 (1990)「魔物たちの夜―聖ニコラウス祭の習俗」『季刊民族学14(1)』pp.6-23
吹田:千里文化財団
- (13) クランプスが背負っている籠に子どもを入れて誘拐し、住処に連れて帰ってから子どもを食べてしまう伝説が基になっている。籠の代わりに収穫された穀物を入れる大きな袋を背負っているクランプスもいる。
- (14) Smithsonian Magazine 「The Origin of Krampus, Europe's Evil Twist on Santa」
<https://www.smithsonianmag.com/travel/krampus-could-come-you-holiday-season-180957438/> 2024.3.26閲覧
- (15) Rae Cenci, *The History Of Krampus: The Christmas Devil Who Punishes Naughty*, Independently published, 2021
- (16) クランプスの風習はヨーロッパの移民によりアメリカにも伝えられた。フロリダ州、サウスカロライナ州、インディアナ州などでクランプスに関するイベントが毎年行われている。(コロナ禍では中止または感染症対策を施し開催) 日本では東京都板橋区に拠点を構えるクランプスジャパンがあり、クランプスの普及に尽力している。
- (17) Mental Floss 「9 Facts About Krampus, St. Nick's Demonic Companion」
<https://www.mentalfloss.com/article/71999/9-facts-about-krampus-st-nicks-demonic-companion> 2024.6.23閲覧
- (18) 菊池良生 (2008)『ハプスブルク帝国の情報メディア革命―近代郵便制度の誕生』集英社
- (19) Al Ridenour, *The Krampus and the Old, Dark Christmas: Roots and Rebirth of the Folkloric Devil*, United States, Feral House, 2016
- (20) Monte Beauchamp, *Krampus: The Devil of Christmas*, United States, Last Gasp of San Francisco, 2011
- (21) Lonely Planet 「Why the Krampus parade is a Munich holiday you don't want to miss」
<https://www.lonelyplanet.com/articles/krampus-run-munich> 2024.6.23閲覧
- (22) オーストリア政府観光公式サイト「ザルツブルク周辺のクランプスとペルヒテの行

列」

<https://www.austria.info/jp/things-to-do/music-and-art/customs-and-traditions/christmas-tradition-in-austria/krampus-perchten-run-in-salzburg-province> 2024.6.23閲覧

- (23) Matthäus Rest, Gertraud Seiser 「Wild and Beautiful: The Krampus in Salzburg」
<https://eva-mpg.academia.edu/Matth%C3%A4usRest> 2024.7.15閲覧

- (24) 観光庁「オーバーツーリズムの未然防止・抑制に向けた取組」
https://www.mlit.go.jp/kankoch/seisaku_seido/kihonkeikaku/jizoku_kankochi/jizokukano_taisei/overtourism.html 2024.7.15閲覧

- (25) 公益社団法人日本観光振興協会「オーストリアチロル州にみる地域DMO先進事例」
<https://www.nihon-kankou.or.jp/dmo/news/news11.html> 2024.6.24閲覧

- (26) チロル州のセルレイン渓谷 (Sellrain Valley) の入り口にあるセルレイン村ではトゥイフルギアン (クランプス・ラン) を長年開催していなかったが、地元住民により2004年に再開された。夏季はアルプスの登山を目的にハイカーが訪れ、冬季はウィンタースポーツを楽しめる。ウィンタースポーツを目的に訪れる観光客向けのイベントとして復活したと思われる。同イベントには聖ニコラスと天使も登場する。

Tirol Info 「Sellrain Tuifl Run and Saint Nicholas Parade」

<https://www.tyrol.com/things-to-do/events/all-events/e-krampus-saint-nicholas-processions-sellrain#:~:text=Large%2C%20foreboding%2C%20black-clad,at%20Melach-Arena%20in%20Sellrain> 2024.7.17閲覧

- (27) AFPBB News 「悪魔「クランプス」が街にやって来た オーストリア」

<https://www.youtube.com/watch?v=TkTsfmQiYKE> 2024.4.5閲覧

オーストリアのシュタイアーマルク州バートミッテルンドルフで2022年12月5日にクランプスが街を練り歩く民俗行事が行われた映像を参照。

- (28) マスコミ、観光客などへ民俗行事を公開する葛藤の一例は、拙稿「コロナ渦中における民俗行事の原点回帰 ―能登のアメハギを例に―」を参照頂きたい。

- (29) 一般財団法人自治体国際化協会「自治体間交流」

<https://www.clair.or.jp/j/exchange/shimai/prefectures/> 2024.6.25閲覧

- (30) Active City Graz Association 「The “Let’s go Krampus Run” on December 5th has to be canceled!」

<https://letsgograz.at/en/2021/11/30/the-lets-go-krampus-run-on-december-5th-has-to-be-canceled/> 2024.4.8閲覧

- (31) Salzburg.info 「This year there will be no krampus parades !」

<https://www.salzburg.info/de> 2022.4.9閲覧

- (32) Antenne Steiermark 「Antenne Online Krampuslauf 2020」

<https://www.youtube.com/watch?v=e5ADgYm6gt8> 2024.4.8閲覧

- (33) Krampusgruppe Haiming 「Krampuslauf 2020 - Video」

<https://krampusgruppe-haiming.at/krampuslauf2020-video/> 2024.4.8閲覧

- (34) ジェトロ「欧州主要国での国内移動制限措置の状況」

- https://www.jetro.go.jp/ext_images/world/covid-19/europe/pdf/europe03a_list.pdf 2024.4.20閲覧
- (35) tyrol.tl「Götzens」
<https://www.tyrol.tl/en/tyrol/innsbruck-and-surroundings/goetzens/>
2024.6.25閲覧
- (36) Innsbruck's「St. Nicholas parade」
<https://www.innsbrucktermine.at/en/veranstaltungen/nikolauseinzug>
2024.6.25閲覧
- (37) 男鹿のナマハゲ保存会(男鹿市・若見町)『記録男鹿のナマハゲ 第1集』(1980)・秋田活版印刷
- (38) The Guardian「Austria struggles with marauding Krampus demons gone rogue」
<https://www.theguardian.com/world/2019/dec/08/austria-struggles-with-marauding-krampus-day-demons-gone-rogue> 2024.7.17閲覧
- (39) TripSavvy「Austria's Krampus Parade: The Complete Guide」
<https://www.tripsavvy.com/krampus-parade-in-austria-tyrolean-christmas-festival-4154986> 2024.4.16閲覧
- (40) インスブルック観光案内所で購入できるインスブルックカードは市内の博物館、美術館、ミュージメント施設、バス、ロープウェイ(往復)が無料など様々な特典がついている。
- (41) Tiroler Tageszeitung, Mittwoch.06. Dezember 2023 79. Jahrgang Nummer 337
「Der Nikolaus zog geterm,begleirt von Engelun und Kindem,durch Innsbruck」
- (42) tt.comによるとオーストリア各地で聖ニコラスが来訪し、時折クランプスも同行していた。
- (43) Tiroler Tageszeitung, Mittwoch.06. Dezember 2023 79. Jahrgang 1Number 337
「Foto des Tages」
- (44) Tiroler Tageszeitung, Mittwoch.06. Dezember 2023 79. Jahrgang 1Number 337
「Von goldenen Äpfeln und guten Taten」
- (45) Tiroler Tageszeitung, Mittwoch.06. Dezember 2023 79. Jahrgang 1Number 337
「Meinung」
- (46) Michaela Holzinger, Nikolaus und Krampus Graus, Austria, Breitschopf Medien Verlag,2019
- (47) Michaela Holzinger,Krampus Graus hilft Nikolaus, Austria, Breitschopf Medien Verlag,2020
- (48) かつての日本昔話は差別的な内容や過剰な表現が含まれており、現代社会にそぐわないという理由から近年出版されている日本昔話はリメイクされている。例えば猿蟹合戦や桃太郎は、勧善懲悪の筋書きが薄れ、物語の最後には敵味方関係なく仲良くなり和解して終わる内容に変わっている。

(すがね ゆきひろ 本学教授)